

定期的な検査で早期発見・治療を

若年層にも
拡がりをみせる

婦人科がんを征圧



熊本大学大学院生命科学研究部
産科婦人科学

教授 片瀨 秀隆

子宮頸癌は、上皮内癌という初期の癌を含めると毎年約1万5千人の日本人女性がかかり、約3千5百人が死亡している、婦人科がんの中で最も多い癌です。この癌は、子宮頸がん検診事業が普及した20世紀後半には死亡率が半減しましたが、最近の20年間で、本来は癌の年齢ではない20歳代、30歳代の若い世代に急増し、この年代の癌の第1位となっています。この年齢で子宮頸癌になって困ることは、妊娠を希望する年齢と一致していることで、結婚や妊娠・出産を前にして子宮を失う悲劇が現実になることです。「がん対策基本法」に基づく国の取り組みによって平成25年には検診受診率が33%まで上昇しましたが、

欧米の70～80%には遠く及びません。

熊本県では、子宮頸がん検診の受診率を上げることに力を注いできた結果、過去7年間の受診率が、20代前半では3%から25%、20代後半では6%から53%と確実に増加し、10万人あたりの死亡率は、12.4から9.2まで下がりました。このデータが示すように、2年に一度の子宮頸がん検診を受けることで、子宮や命を失わずにすむ子宮頸癌の早期発見、早期治療に繋がります。産婦人科を敬遠せずに、かかりつけや近くの産婦人科で定期的に子宮や卵巣の検診を受けることを心がけましょう。